



## 佛子の進むべき大道

丸 山 顛 孝

世人多くは匆々として衆務を營み、年命の日夜に去ることをも覺せず、煩惱の波高くして靜まることなし、生死の海深くして底を知らず、唯徒に五欲本能の樂を貪りて、生死の苦海を押渡り、涅槃の岸に至るべき船を需めんとする様もなし。

吾等如何なる宿縁の報ありてか佛弟子となり、三界無安の火宅を逃れ、常樂我淨の佛道に辿り入りぬ、されば我身佛になるのみならず、父母を救ひ、祖先を助くるの功德あり、誠に世にも尊く亦惠まれたりと云ふべきなり。

佛大集經に説き給はく、頭を剃り袈裟を着ぬれば持戒及毀戒ともに天人之を供養すべし、是即ち佛を供養するものなり。と吾と我弟子賞讃の辭も懇なり、實に我等末輩は身に一つの戒徳もなく、心に三毒を離れざれども、無學破戒をそのまゝに、佛の瑞喜身に餘り、世の尊信は分に過ぎたる極みなり

宗祖大士が、元より學問し候事は、佛教をきわめて佛になり、恩ある人をも援けんと思ふ、佛になる道は身命を捨つる程のことありてこそ佛にはなり候らめと推し量る。と仰せ給へるは實に吾祖が敢然として胸中の決意を述べたまへる出家門出の宣言なり。

時は移り世も亦變りて、末の代となれば我人共に漸く恩に忝れ、勇猛にして精進し、心を擯して常に勤むる心失せ、我慢に著し、師をいやしみ、檀那にへつらうこと日に繁し。

傳教大師は此のことを慨きて顯戒論に訖王の物語りを引きて吾等を戒め置き給ひぬ、抑訖王の物語りとは、往昔波羅那城に大王住みぬ、此王或夜夢みらく九頭の大なる獼猴ありて、盛に城中を騒亂せり、然るに他の一匹は知足の念を懷きて少しも騒ぐ様もなし。夢醒め終つて大王餘りの不思議さに占者を召して之に問へば、彼恐るゝ答ふる様、こは恐るべし王位篡奪の凶夢なれば、大王心して然るべしとぞ答へけり。王之を聞きし後は暫くも安ずることなく、急ぎ迦葉佛の御下に詣で、委細を告げて教へを乞ひぬ。佛王に告げて宣べ給ふよう、これ汝一人の難にはあらず、末法濁惡の未來に於ける佛法陰没の相なれば、王心に正法を信じ護惜建立の誠を致さば、國土永へに安穩ならんとぞ諭しけりと云ふ。この一猿九猴とは末代に出家入道する者の動機を數へ給へるなり。九猴とは、一は貧人として衣食に乏しきため、二は奴婢として身分の賤しきを逃れんため、三は債負として財政破産し終れるため、四は勝地として勝景靜境を願ふため、五は名稱として世間に賣名を欲するため、六は生天として誤れる果報

を需めんため、七は利養とて己が懷を肥さんため、八は求王とて貴き位を得んがため、九は述過とて佛教の缺點を捜さんための出家なり。亦一猿とは少欲知足にして眞實に發心して道の爲めに出家せるものを擧げたるなり、實に今の世は九猴に類するものは多く、一猿に當るものは爪上の土よりも少く、市中に虎を需めんよりも尙稀なること大師の御言の如くなり。

吾祖は破佛破法の吾等を教へて宣ふよう、大族王の五天の堂舎を焼き拂ひ、十六大國の僧尼を殺せし漢土の武宗皇帝の九國の塔寺四千六百餘所を消滅せしめ、僧尼廿六萬五百人を還俗せし等の如くなる惡人等は佛法をば失ふべからず。(撰時抄)我法は惡人外道天魔波旬等には破られず、佛の六通の羅漢の如く、三衣を袈裟の如く身に紆ひ、一鉢を兩眼にあてたらん持戒の僧等と、大風の草木を靡すが如くなる高僧等吾正法を失ふべし。(神國王書)人久しと云へども百年には過ぎず、其間のことは唯一睡の夢ぞかし、受け難き人身を得て適出家せる者も佛法を學し謗法の者を責めずして、徒に遊戯雜談にのみ明し暮さんは法師の皮を着たる畜生なり、法師の名を借りて世を渡り身を養ふと雖も、法師となる義は一分もなし、法師と云ふ名字を盜める盜人なり、恥すべし恐るべし、とこれ我等の身にどりて金科玉條に非ずして何とやせん。

恒に蒼海の窮りなきを觀るものは、その大なることを知らず、常に畦かきりなき原野に居るものは其廣きことを知らず、是久しくして狃るればなり、豈たゞ海洋と原野とのみならんや。

吾等常に諸惡莫作、衆善奉行と唱ふれども、偶來し方の跡を顧、進まんとする道を仰げば轉々懺悔歎息の自ら禁じ難きを覺ゆるなり。

蓋し我等の行ずる佛教は自行と化他との二柱ありて世に住す、智慧を研き、精こころを鍛へるを定善と云ふ、これ即ち自行なり。他人を教へ堂塔を建つるを散善と云ふ、これ即ち化他と云ふなり。此の中散善は近くして行じ易けれども、定善は遙に修し難し。定善を更に分ちて行學の二とす。吾祖の行學の二道を勵み候べし行學絶へなば佛法はあるべからず。(實相抄)との給ふのはこれなり、此の二道は鳥の雙翼、車の兩輪なれば元より、傍正主伴は辨じ難きも、次下に行學の二道は信心より起るべく候とあるを拜すれば正しく行の家の學なることは明なり。散善とは又自ら著述、說法と堂塔建立等の二となるべし、此の中堂塔建立は俗人の所行なり、說法開導は沙門の勤めなり、古よりそのためし殊に多し、奈良の東大寺は聖武天皇の御建立、京の卅三間堂は白川法王の御建立なり、當家の大伽藍又多くは在家特志の建立に依るもの多きを見ても知るべきなり。

堂塔の建立せらるゝ所以を考ふれば、當時の貴僧高僧何れも、教化救濟の徹底して親切篤實なりしが爲なりき。是等名僧智識の深遠微妙なる說法教化の源泉は一に學問修徳の功に非らざれば到底望み難きことがらなり。然るに學問の功をも積まずして他方に弘通せんとするもこれ如何程の功があらん亦不學にして堂塔の建立を營むとも誰か後代まで之を崇むべき。蓋し定散二善の内、定善の人目に顯

はるゝことは誠に容易ならざれども、之に反して説法堂塔建立の散善は忽ち衆目を吸引す、これ人情の常として主たる自行を忽にして、従たる化他に急ならんとする所以なり、吾等は名聞材利の爲めに佛道に入りしには非らざるなり、人目世評を本位として學問修行に日夜精勵するにはあらざるべし。要は唯佛教を成して、父母、師匠、恩ある人に報ひんこそ出家の素願にてあるべきなり、深きは難く淺きは易し、易きを捨て難きに就くは丈夫の心なりとは宜<sup>うづ</sup>なるかな。

堂塔高く薨を連ね、經藏軒を並ぶるとも、高德の人無くんば誰をか需めて師とやせん、道を體驗する人なくんば講經談義の聲も絶へなん。これ所謂伽藍の佛教にして、佛教本來の命脈は既に壞滅して奈良平安の佛教にも如かざるべし、佛法には賢げなる様なれども、時に依り、機に従ひ、先後弘通に依ることを辨へざれば、身心を苦しめて修行すれども驗なきことなりと吾祖の誠め給へる如く、吾等の修行には自行あり、化他あり、自行の中にも行あり、學あり、化他に就ても講經あり、建立ありて取捨宜しきを得て一向にすべからず、廢立取捨は一定ならず、圓轉自在なりと雖へども、吾等佛子の進むべき大道は、正しく自行の家の化他なり、徳行の家の學問なり、講經談義の家の堂塔建立なるべきなり、吾等今より二陣三陣と御跡を繼ぎ、唯此白道を邁進して倒れて而して息まんのみ。